「破戒」と「罪と罰」の比較文学的研究

吉田孝子

㈠ 序

無から有が生じるということが断じてあり得ないように、「破戒」も忽然としてこの世に創作されたのではなく、音楽界の巨匠ベートーヴェンが、最初ハイドン・モーツアルトに傾倒し模倣した様に、また、経済学のマルクスが、始めは、ケネー・アダム・スミス・リカアド等に感化されたように、「罪と罰」という素地があつた為に、「破戒」という素晴らしい小説が完成されたのである。

そこで、「破戒」と「罪と罰」の類似を徹底的に追求するのも決して無意味な事ではなく、「破戒」を鑑賞する上に於いても、両作の関連を知る事は極めて重要な問題であると考える。

㈡ 構想・主題　叙述面に於ける両作品の比較考察

ここでは、作品の内容について、内外両面を貫いている根本思想の呼応如何を実証的に展開する事により「破戒」が「罪と罰」の影響を濃厚に受けている事を示そうと思う。

先ず構想を眺めると、主人公に「破戒」では、部落民である為に苦悶し悲嘆にくれる男と、「罪と罰」では、殺人故に終始苦悩の中にいる男を配置したこと、しかも生きる為には、告白する事によつて、已の平安が得られるというテーマを持つて来た事は全く相似しており、事件の内容は異なるにせよ、主題の運び方、人物配置（後述）まで著しい近似を程している。「破戒」の構想は、明らかに「罪と罰」からヒントを得て執筆されたものと考える。

次に主題について比較考察してみよう。

両作の主題については、今日多くの評者が論じていられるので、ここでは要約してそれを紹介し、其の上批判しながら、主題の見解をほどこしたいと思う。

「破戒」の主題

(1)「社会が丑松を迫害する面を主題と見ずに、丑松の感情を主題として見る。即ち、丑松を自己の孤独の生きた人間像化した点に、『破戒』のテーマがある。」（文芸）佐藤春夫氏はこの様に「主題の見解を述べ、亀井勝一郎・中村光夫・小宮豐隆氏等も同意していられる。

(2)「藤村は部落民への迫害を、いわば避け難い社会的条件として、その中で生を求めやうとする苦悩の丹念な追求これがテーマである。」（島崎藤村）瀬沼茂樹氏は可様に推考され、伊藤信吉・館岡俊之助・エヌフエリドマン・三好行雄・昇曙夢氏等も同説である。

(3)「隠す事により保たれるはずの平安が、告白する事によつて、却つて得られる丑松の心境、即ち告白をテーマとした。」（島崎藤村）木枝増一氏の「破戒」に対する主題の考察で、松野久男・平野謙・中村・瀬沼・白雲子・塩田良平・湯地孝氏も・同説である。

(4)「差別される部落民の問題をとりあげて、人間解放を主題とした。」（文学）北原泰作氏はこの様に見ていられる。また、館岡・野間宏・藤井義明・岩永胖氏も同じ見解である。

(5)「敬之進の言葉に、（碌々といふ言葉の内に、どれほどの酸苦が入つていると考える?）といふのがあるが、この（碌々たる者の酸苦）がこの『破戒』の主題である。」（中央公論）烟霞氏説。

(6)「倫理的な善を主題として、その善が凡庸・下層の人間の中にも善と美を発揮し得るといふ事をテーマとした。」（文学）岡崎義恵氏説

「破戒」の主題は以上六種に区別される。そこで右述の六種にわたつて私評してみよう。

(1)は、実に微妙な心理的な考察である。しかし、「破戒」は果して丑松を作者の生きた人間像と化した点に、テーマを求めてよいだろうか。昔、奈良平安時代には、短歌・旋頭歌等、主に表裏二つの意味があつたが、この場合も同様に、(1)は裏の解釈であつて、表面の主題として推考する事は出来ない。藤村の性格、環境を熟知の上で、「破戒」を鑑賞すれば別問題であるが、そうでなければ、(1)の様な主題を推知する事は出来ない。あまりにも偏見過ぎるようである。

(2)は(1)の場合と反対の事が言えよう。これは又、単純な表面上の解釈に過ぎず…心理的内面的理念を無視して論じている。

(3)の〃告白〃をテーマと見たのは穏当である。告白する事によつて平安が得られる。というのは、精神的に苦しんだ藤村が、当然書こうとした信念であつたと考える。しかし、(3)は部落民という問題に、非常にとらわれ過ぎている傾向がある。この点全面的に賛成出来ぬ。

(4)の主題の解釈は、実に一方的である。「破戒」には全然人間解放の息吹きは感じられない。連太郎が僅かに社会の矛盾に挑戦している程度である。

また丑松は、部落民が卑しい人間である事を前提としている。その具体的な現出は、最後のシーンで、丑松が生徒の前で自分の素性を告白し、額を土につけて、「許して下さい。私は不浄な人間です。」と言つて許しを乞う。ここからどうして人間解放の芽が感じられよう。しかも勇敢に戦つている連太郎ですら、「ねえ瀬川君、僕も御承知の通りな人間でせう。他の場合とは違つて、選挙ですから、実は僕などの出る幕ではないと思つたのです……」と語つているが、この言葉自体すでに、連太郎は部落民が下等な人間である事を認めているではないか。

又最後に、テキサス行きという浪漫的な解結で終つている事によつても、人間解放、社会問題の追求はない。このテーマの推考はあまりにも飛躍している。

(5)最初から問題になるまい。

(6)は興味ある観察で、倫理的な善を「破戒」は追求したと岡崎氏は見られるが、この解釈は今迄の思考と全く孤立した新鮮な説である。

確に「破戒」の底に流れているのは〃善〃の追求であるが、この〃善〃だけで「破戒」の主題を論じるのは一方的である。テーマの一片と見たい、

以上六種について批判して来たが、私はもう一つの深い隠されたテーマがあると思う。それは〃愛の精神〃である。これを見逃して「破戒」の主題を論ずるのは軽率である。私の「破戒」に対する主題の見解は、(1)(2)(3)を混合した説に〃善〃と〃愛の精神〃を底流させて考えるのであつてこれが最も妥当であろう。即ち、丑松は部落民である為に父の遺言「隠せ」という戒を守る事により、新時代の矛盾に対して内的苦悩する。作者は丑松の思想感情を描写しながらも、反面に於いては、丑松が父の教を裏切つて苦しむ様に、藤村も又苦悩し、彼の精神的苦辛を部落民という素材に託し、丑松に自己の孤独の生きた人間像と化した点に、「破戒」のテーマがある。表面的丑松の解決は〃告白〃によつて平安が得られるが、主題の裏付けとして〃善〃と〃愛の精神を流露させている。一般民衆への愛が主題の根本思想として貫かれている。この様に「破戒」の主題を推量するのである。

「罪と罰」の主題

(1)「善と悪、善と不滅とを弁ぜぬ理不盡なしに横行する、この許す事の出来ぬ事実の為に、神と正義とを疑い、之を否定せんとした一人の男が、悪闘の末、遂に神と正義とに服するに至つた物語で、霊肉の深

刻な葛藤、運命の不公正を主題とした。」（ドストエフスキー）吉村善夫氏は前述の様に考えられ、またこれは中山省三氏の説でもある。

(2)「犯罪小説や推理小説でもなく、如何に生きるかを問うた或る『猛り狂つた良心』の記憶、『罪とは何か』これが主題である。（私の人生観）小林秀雄氏の主題の推考である。

(3)「深刻に犯罪の心理を描いた小説で、作者はラスコーリニコなる人物を借りて、超人の思想を現わし、その影に、神に対する信仰を裏付けしている。その思想と人間性の格闘の精細を極めた過程で、これがこの作のテーマである。」（ドストエフスキー）新城和一氏の主題の見解で、中村白葉、界曙夢氏も同説

(4)「かつて作者が、シベリヤの獄中で見出した不敵な囚人の影像に、ヴイースベーデンの悲惨な体験を寄り合わせ、『人は理智のみで生き得るか』という恐るべき問いを追求した小説である。」（ドストエフスキー読本）神西清氏説

右四項に「罪と罰」の主題を区別したが、この四点について少し考えてみよう。

(1)の「神と正義を疑い、これを否定せんとした一人の男」というのは過言ではないだろうか。何故なら、ラスコーリニコフは、事実眼前の正義を否定した結果、殺人という罪を犯したが、彼は終局神まで否定しなかつたのである。この点多少疑問に思う。

(2)は順当な論であろう。しかし「罪とは何か」これが主題であると小林氏は述べていられるが、表面的解釈であつて、この小説全篇に拡がるテーマは、もつと深刻なものではないだろうか。軽薄過ぎるようである。

(3)は、ラスコーリニコフなる人物を借りて超人の思想を作者は現わしていると解していられるが、私も新城氏に全面的に同意する。しかし、(3)が完全なる主題と考えるのは、少し早すぎるようである。

(4)の「理智のみで生き得るか」がテーマであれば、あまりにも複雑な内容を成す「罪と罰」は理解されたとは言えない。(4)は主題の一片であると考える。単純な論である。

以上四項につき私見を述べたので、そこで「罪と罰」の主題を検討してみよう。

私は先ず、(1)と(3)、それに、私が重要視する〃愛の精神〃が混入して、「罪と罰」の主題を作り上げていると考える。即ちラスコーリニコフは、個人を忘れた社会を標準に、一小悪は百の善行によりつぐなわれるという理念に基き、一見何の価値もないと思われる金貨老婆を殺害する。しかし斧で倒したその足許から、彼の理論は忽ち崩れ始めて、冷酷なまでに厳粛な現実が容赦なく彼の一身を襲う。しかも犯した罪の当然の罰として、彼の苦毒は、心理的に、肉体的にも堪え難いものとなり、隠す事によつて、却つて心の安らぎが得られるという事を主旨として、その根底には、善と悪、信仰と不信仰、そして愛の問題の三つが複雑に流露し乍ら、この極めて理解し難い「罪と罰」の主題を作り上げている。全篇にあふれる〃愛〃と〃善〃、これなくして主題を論ずる事は出来ない。多くの評者が見逃している〃愛〃を重視する。両作の主題を研究して来たが、最後にここで最も大切なテーマである両作の主題の比較を試みよう。

「破戒」がヒーローを部落民に、「罪と罰」が殺人犯にとり、彼等が隠す事によつて得られるはずの平安が、告白する事により得られるというこの主題のとらえ方は、非常に合致して居り、「破戒」の主題は「罪と罰」のテーマからヒントを受けて、構成されたものと考える。

両主人公が、素性と犯罪の為に苦悩悲嘆する。その微妙な心理的動揺は全く近似しており、また主人公に、「罪と罰」では作者の思想を託

し、「破戒」では作者の感情を託して、人間像化した点は実に共通している。其の上、作品の裏付けとなるのが〃愛〃と〃善〃の問題である事、この二つが根本思想となつているのは著しい相似である。伊藤信吉氏が「島崎藤村の文学」で『破戒』は封建的観念に対する抗議ばかりでなしに、被圧迫層一般についての愛を示し、虐げられた人々への愛は、市井事を扱つた作品のモチーフもなしてゐる。」と述べ、また氏は「一時代のロシア作家達は『民衆の中へ！』といふ合言葉をもつて時代と民衆の中に、その文字をさらさうとした。」とも語つている。

新城氏は「ドストエフスキー」の中で、『罪と罰』では、作者は神と悪魔の戦場たる人間の心を暗い光を発する潜在的な愛を以て描き出した。」と評しているが、両氏の意見を考え合わせると、両作共、同様に市井人への、民衆への〃愛〃で貫通されている事が明白である。純潔な愛の世界が描写されているのである。この様に主題を比較考察した場合考えられるのは「破戒」のテーマは全く「罪と罰」の模倣と言つても過言でない位に一致している。「罪と罰」が「破戒」に及ぼした示唆は極めて大きいものがある。さて次に叙述面に於ける両作品の比較考察を進め、両作の類似を実証的に探究しよう。

(1)登場人物について

両作品に於ける主要人物の比較表を示すと鮮明であるが、枚数の関係で、呼応する理由を詳細に述べることにする。

丑松とラスコーリニコフ。丑松は「破戒」の主人公で廿四才、部落民である。ラスコーリニコフは廿三才、元貧乏大学生で老婆殺しの犯人である、丑松は部落民である為に素性を隠そうとする。しかし隠す事により尚一層苦悩は拡大する。一方ラスコーリニコフも殺人犯の為にその罪を隠す。しかし隠すに倍して良心の葛藤は大きくなる。両主人公の心理的苦悶、又暗うつな性格は類似しており、ラスコーリニコフなる人物を借りて丑松は描出されたものと考える。

銀之助とラズーミヒン、それぞれ主人公の親友である。両人共単純なまでに善良な青年で、親身になつて友人を愛し面倒を見る。

銀之助の性質・動作・態度は明らかにラズーミヒンからの暗示を得て写生されたものと推察する。

敬之進夫婦とマルメラードフ夫婦。敬之進は元大地主で落ちぶれた教員、マルメラードフは九等官の退職官吏で、彼等は善人であるが甲斐性がなく、終日酒に酔いしれて不幸な境遇に甘んじている。両者共再婚者で敬之進には前妻の子が一男一女、マルメラードフには一女ある。妻達は気性が激しく、夫不甲斐さに一人で働き続けている。各々夫婦の間には口論が絶えず冷たい家庭生活を営んでいる事等、非常に一致している。窮乏な家庭生活、両夫婦の性格境遇は右述の如く誠によく類似しているのである。

お志保とソーニヤ。お志保は敬之進の先妻の子であり、ソーニヤもマルメラードフの先妻の子である。両者は一家を救助する為に、お志保は蓮華寺の養女となり、ソーニヤは娼婦となつて働いている。二人共教養高き女性ではないが、確乎たる信念と深い愛情をもつて容易にその意志は動かない。しかも彼女達は、進んでより不遇な丑松、ラスコーリニコフに純清な愛を捧げ、生涯を共に歩く決意をする。両者の犠牲的精神、性格、環境は著しく共通している。

其の他、勝野文平とルーヂン並にペトローボッチの近似、和尚夫婦とスヴイトリガイロフの相似、丑松の叔父夫婦とラスコーリニコフの母並に妹の愛情の合致等、出場人物は全く呼応している。この点「破戒」の主要人物は「罪と罰」から摂取して描写されたと考える。

(2)文章上に現われた叙述描写の比較研究

「破戒」は「罪と罰」の如何なる場面からヒントを得て文章上表現さ

れているか、具体的に究明して行きたいと思うが、枚数の関係上、二例だけ挙げる事にする。

(1)「丑松は生徒のところへ手を突いて、詫入るやうに頭を下げた。(皆さんがお家へお帰りになりましたら、何卒父親さんや母親さんに、私のことを話して下さい——今迄隠蔽して居たのは全く済まなかつた。と言つて皆さんの前に手を突いて、かうして告白けたことを話して下さい——全く私は皆さんを欺いてゐたのです。)」

Everything in him sebtened at once and the tears started into his eyes, He fell to the earth on the spot……
He knelt down in the middle of the square, bowed down to the earth, and kissed that filthy earth mith bliss and rapture. He get up and bowed down a second time.

右の両場面を比較した時、如何に両者が共通しているかを理解出来よう。丑松が生徒の前に膝をつき、額を塵埃の中に埋めながら部落民である事を告白し、許しを乞うシーンは、ラスコーリニコフがソーニャの言葉に従つて、広場の中に膝をつき地面に身をかゞめて汚土に接吻する光景から影響を受けていると思う。作中ここが最も大きな感化を受けている。

(2)「最早、今限りであるかと考へると、目に触れるものは総て丑松の心に哀しい可懐しい感想を起させる。平素は煩いと思うやうな女の児の喋舌まで、其朝に限つては可懐しかつた。」「憶、生徒の顔も見細め、教室も見細め、今は最後のけいこをする為に茲に立つてゐる。とかう考へると、自然と丑松は、胸を躍らせて熱心を顔に表わして教へた。」

He looked eagerly to right and left gazed intently at every object and co could not fix his attention on an anything; everything slipped away, In another week another month I shall be driven in a prison van over this bridge, how shall I look at the canal then ? I should like to remember this! slipped into his mind, Look utthis sign! How shall I read those letters then ? It's written here „Campany" that's a thing to remember, that letter a and to look at it again in a month-how shall I look at it then? What shall I be feeling and thinking then?

前者は、丑松が生徒の前に自分が部落民である事を懺悔する直前の情感である。また後者は、ラスコーリニコフが犯した罪を告白する寸前の感情である。両者を比較してみると、如何にその告白する前の心理的動揺が相似しているかを理解する事が出来るのである。

彼等は、人々と一緒に自由な心身でいるのは今限りで、自白した後は両人共捕われの身であり、放逐された身上である。文章といい、内容といい、極めてその関連は大きい。今日まで指摘されなかつたのが全く不思議である。

以上二例だけしか紹介しなかつたが、其の他に実に十七項の類似の大きを見る事が出来るのである。前述の二例により、如実に両作品の呼応している事を示したが、「破戒」はこれだけからも「罪と罰」から表現上多大な示唆を得ている事を認知する事が出来るのである。

構想、主題、叙述面に於ける両作品の比較研究をほどこして来たが、これ等によつて「破戒」は「罪と罰」から全面的に濃厚なる指示を受けて描写された事は明確である。

㈢ 制作上の心理的背景について

さて、限られた枚数も後僅かとなつた為に、制作上の心理的背景については残念乍ら、ここで述べるだけの余裕はない。たゞここで言いたい事は、藤村の精神的、経済的苦悩はドストエフスキーのそれに近似しており、藤村が自然、十余年前読破していた「罪と罰」に彼の苦悶を求めたのも納得がゆくのであつて、また、藤村もドストエフスキ

ーも、「破戒」と「罪と罰」を創作した寸前の社会状勢を無視して筆を進める事が出来なかつたのも、興味ある関連である。一方、藤村を感化した作家詩人を眺めると、非常に多く、換骨奪胎の巧妙な人という定評を裏付けする事も出来るのである。

数多き外国及び日本の先輩は、藤村に、思想的に文学的に人生上の問題に社会問題に、強烈な影響を与えたのであつた。彼等が藤村に及ぼしたものは、直接、間接に作品上現出されているのである。藤村の制作上に於いて、絶対忘れる事が出来ないのは、かように、多数の人から示唆を受けている事で、ドストエフスキーからだけ影響を受けたのではなかつたのである。「破戒」が「罪と罰」の暗示を得た事も、間接的にせよ極めてスムーズで、納得が行くのである。

また藤村及び当時の日本の作家はロシア文学に対して非常に強い関心を寄せていた事にも注意を要しよう。日本の文壇が自然主義文学に傾倒していた頃、日露戦争という気運に乗じて、ロシア文学は当時の日本の作家に鋭くアッピールしたのであつて、自然主義文学に走つた藤村が昂揚しつつあつたロシア文学に指示を得たのも穏当である。

簡単に節々の結論だけを述べて来たが、「破戒」が「罪と罰」の強深な影響を受けて執筆されたことは制作上の心理的背景についても確実である。

(四) 結び

最後に今迄研究して来た事柄を再度眺める事にしよう。先ず両作品の相似する理由を挙げてみよう。

(1)構想に於いて全く一致している事。

(2)主題の貫くところは共通している事。即ち

ⓐ隠す事により保たれるべき平安が、告白する事によつて、却つて得られるというその告白をテーマの一片とした事。

ⓑ作者は各自、自己の作品に思想感情を託して表現した事

ⓒ作品の根本思想が〃善〃と〃愛の精神〃である事、これがテーマの裏付けとなつた事。

(3)主要人物の配置、並びに性格、境遇の近似の著しい事。

(4)文章上に表現された叙述描写の類似は極めて顕著であること。

(5)藤村がロシア文学に対して深い関心を寄せていたこと。

以上五項目の理由により「破戒」は「罪と罰」から感化を受けて、制作されたことは明確である。中でも、特にテーマの呼応を見逃すことは出来ず、根本思想の合致により、両作品の関係は非常に密接である。

以上で、一応の結論は出たのであるが、これだけで結論を引き出すのは、あまりにも軽薄ではないだろうか、そこでもう一歩進めて検討してみることにする。

「破戒」が、今日尚も昭和小説と並列して迎合されている理由は、この小説に藤村の盛つた独創、即ち具体的に言えば、丑松という人間の創造に示された作者の発想法の新しさであり、この作の主人公と作者とが、互に内面の苦悩によつて結ばれている点にあると思われる。藤村にとつて、部落民に対する偏見という社会問題は、彼の義憤を燃やす不正である以前に、その犠牲者の心情を、自己の分身として辿る契機であつたのであり、丑松を、自己の孤独の生きた人間像と化し得た点に「破戒」が当時流行の社会小説・私小説を越えた価値を持ち得たわけであると思われる。ここに藤村固有の独自性があつたのである。また「破戒」に於ける巧みな自然描写、印象的な色彩感覚に富む描出は「罪と罰」では全然発見する事が出来ない。ここにも藤村の独特性があるのである。

「破戒」は「罪と罰」という素材があつた為に、藤村特有な作品が形成されたのであつて、その呼応だけを一方的に指摘したり、また反面「罪と罰」の影響を認めなかつたりする説は、過論であろう。